「韓日民族問題研究」39号(2020.12)

目 次

特集論文

国際国家日本の国際的役割の模索に関する研究
－1980年代と1990年代を中心に－ | 趙真九 ····· 5

1980年代の日本の保守運動と中曾根内閣の教育改革
－「戦後の政治総決算」の歴史政治的含意－ | 崔恩鳳 ····· 47

靖国問題の国際化と日本の保守運動
－中曾根首相の公式訪問を中心に－ | 柳芝娥 ····· 85

學術論文

韓国戦争捕虜に対する尋問の報告書を通じて見た日本軍出身の
北朝鮮軍内の活動と北朝鮮の親日派粛清 | 李相昊 ····· 125

解放後の在日朝鮮人の生活空間の変容
－大阪鶴橋一帯の「市場化」を中心に－ | 朴美娥 ····· 163

在日朝鮮人と高麗人の超国家的連帯と コリアン・ディアスポラの可能性
－在日朝鮮人雑誌『民涛』と文化活動を中心に－ | 李栄鎬 ····· 207

資料紹介

近代朝鮮における朝鮮人の飛行士たち | 金智媛 ····· 247

書評

菅義偉,『政治家の覚悟』(文芸春秋, 2020年10月) | 崔永鎬 ····· 285

執筆要綱

發刊 及 審査規定

彙報

http://doi.org/10.35647/kjna.2020.39

국제국가 일본의 국제적 역할 모색 연구*

－1980년대와 1990년대를 중심으로－

조진구**

〈 차 례 〉

Ⅰ. 머리말
Ⅱ. 후쿠다 독트린의 등장 배경과 의미
Ⅲ. G7 정상회의와 국제국가 일본의 외교
Ⅳ. 냉전의 종식과 일본의 '국제공헌'론
Ⅴ. 맺음말

Ⅰ. 머리말

일본이 아시아에서 처음으로 하계올림픽을 개최했던 1964년 일본은 선진국 클럽이라 불리는 경제협력개발기구(OECD) 회원이 되었다. 11년

* 이 논문은 동북아역사재단의 지원을 받아 수행된 연구임(NAHF-2020-기획연구-20).

** 경남대학교

国際国家日本の国際的役割の模索に関する研究

－1980年代と1990年代を中心に－

趙眞九

戦後の日本外交は新たな国際秩序の創出のための理念と構想が欠けていたとの批判を受けてきた。この研究では、戦後最初の理念主導の外交と評された1977年8月の福田ドクトリンの背景と内容を踏まえて、1980年代と1990年代を研究対象にして日本が国際社会でいかなる役割を果たそうとしたのかを歴史的文脈のなかで考察してみた。

1977年8月に発表された福田ドクトリン以降、日本は経済中心の東南アジア外交から脱してアジア太平洋地域へと関心領域を広げていった。また、アジアで唯一にG7首脳会議に参加するようになるまで国際的地位が向上された日本は経済問題のみならず安全保障問題まで積極的に取り組んでいった。日本外交のグローバル化と冷戦の終結という国際環境の変化の中で日本は、PKO協力法を制定して自衛隊を国連平和維持活動(PKO)に参加させるようになった。これを機に日本外交安保の中核というべき日米同盟も変貌し、「国際貢献」という名の下で自衛隊の活動領域も拡大され、日本の防衛政策や防衛力にも大きな変化が見られるようになった。

これらの変化は、日本が単なる経済大国ではなくグローバルな行為者として積極的なリーダーシップを発揮して経済以外に政治軍事的側面で国際社会からの期待や日本自ら自覚した責任と役割とも関連がある。これは、1980年代と

1990年代に欧米とともに3極を形成するほど経済的存在感が大きくなったのを背景に推し進められた日本の「大国志向」外交がよく表れていた。そこには一定の成果とともに限界があり、21世紀における日本外交の課題として残されていたと言うこともできる。

1980年代の日本の保守運動と中曾根内閣の教育改革

－「戦後の政治總決算」の歴史政治的含意－

崔恩鳳

この研究の目的は1980年代の中曾根康弘内閣の教育改革の特徴と政治的意味を説明するのだ。著者は中曾根の教育改革の二重性と日本社会と東アジアの近隣諸国に対する歴史的、政治的意味を明らかにしようとした。中曾根の教育改革は、保守主義と新自由主義性向を持った中曾根の政治ビジョンと統治スタイルと緊密に連携した。中曾根の「戦後の政治総決算」という政治スローガンは、教育改革を通じて保守主義的新自由主義の総体的改革を達成するための政治メカニズムとして機能した。これにより、中曾根教育改革は、1980年代の日本社会と政治での保守運動を形成する動力の基盤を提供した。1980年代の日本の保守運動は、その後、東アジアの歴史認識に否定的な遺産を残す方向に展開された。

http://doi.org/10.35647/kjna.2020.39.85

야스쿠니 문제의 국제화와 일본의 보수운동*

－나카소네 총리의 공식참배 문제를 중심으로－

유지아**

〈 차 례 〉

Ⅰ. 머리말
Ⅱ. 1980년대 야스쿠니신사 참배 문제의 국제화
　1. 1985년 나카소네 총리의 야스쿠니신사 공식참배
　2. 야스쿠니신사 공식참배 문제의 국제화
Ⅲ. 야스쿠니 공식참배에 대한 소송문제
Ⅳ. 야스쿠니사관과 일본의 보수운동
Ⅴ. 맺음말

Ⅰ. 머리말

아베 신조(安倍晋三) 전 일본 총리가 2020년 9월 16일 공식 퇴임 후

* 본 연구는 NAHF-2020-기획연구-20의 지원을 받아 수행함.
** 원광대학교 동북아시아인문사회연구소 HK교수

into Yasukuni Shrine. As the voices of criticism increased in Asian countries, the issue of worship at Yasukuni Shrine became an international issue.

Meanwhile, Japanese politics in the 1990s was a process of transition from the international situation of the collapse of the Cold War to changes in the domestic situation such as the collapse of the LDP(自民党)'s long-term power. The Nakasone regime advocated a policy goal of reviving the good things lost due to the defeat, with the slogan of "the total settlement of postwar politics". Under such circumstances, the issue of Prime Minister Nakasone's visit to Yasukuni Shrine has not only been criticized internationally, but has spread to domestic lawsuits. The result of the lawsuit was dismissed because there was a suspicion of the constitutionality of the official visit to Yasukuni Shrine, but there was no need to judge the allegation, and the plaintiffs were not infringed on any rights or interests. However, the Yasukuni lawsuit brought the conservatives of Japan to unite. Eventually, conservative members formed a Conservative Parliamentary League and launched a conservative movement. In addition, in solidarity with other conservative forces, it has been influencing the conservativeization of Japan by developing a strong national movement such as normalizing education, editing history textbooks, and advocating a new constitution.

靖国問題の国際化と日本の保守運動

－中曾根首相の公式訪問を中心に－

柳芝娥

本研究は、1985年に中曾根康弘首相が靖国神社を正式に訪問した時期を扱っている。それ以来、靖国神社への靖国首相の訪問の問題は国際的な問題に発展し、保守的な運動につながる。靖国神社問題は東アジアの歴史紛争の重要な問題の1つであるが、1985年までは東アジアの観点から考えることができなかった。そのため、日本政府は1978年に靖国神社に7人のA級戦争犯罪者を合祀した。その後、中曾根首相が正式に靖国神社を訪問すると、国際社会は日本人の歴史観を批判し始め、日本では中曾根首相の靖国神社参拝問題と靖国問題に対する論争が始まった。日本の各新聞では、「近隣諸国への配慮」や「靖国と国際社会」などの表現が見られるなど、靖国問題をもっと真剣に受け止めた。韓国と中国では、A級戦争犯罪者が靖国神社に合祀されると、靖国神社への関心がさらに高まるとうになった。アジア諸国で批判の声が高まるにつれ、靖国神社での崇拝の問題は国際的な問題になった。

一方、1990年代の日本の政治は、冷戦崩壊という国際情勢や、自民党の長期執権の崩壊という国内情勢など、変化の過程であった。中曾根政権は、「戦後政治の総決算決」をスローガンに、敗北により失われたよいところを回復させるという政策目標を提唱した。このような状況の中で、中曾根首相の靖国神社参拝の問題は、国際的にも批判されているだけでなく、国内の訴訟へと広

がっている。訴訟の結果は靖国神社の公式訪問の合憲性が疑われるところがあるにも関わらず、申し立てを判断する必要はなく、原告はいかなる権利または利益も侵害されなかったとし、却下された。しかし、靖国訴訟は日本の保守派を団結させた。最終的に、保守議員らは保守議員連盟を結成し、保守運動を開始した。また、他の保守勢力と連帯して、教育の正常化、歴史教科書の編集、新憲法の提唱など、強力な国民運動を展開し、日本の保守化に影響を与えている。

http://doi.org/10.35647/kjna.2020.39.125

포로신문*보고서를 통해 본 일본군 출신의 북한군 활동과 북한의 친일파 숙청

이상호**

〈 차 례 〉

Ⅰ. 머리말
Ⅱ. 한국전쟁기 ATIS와 포로신문보고서
Ⅲ. 북한의 친일파 숙청상황과 전개
Ⅳ. ATIS보고서에 나타난 북한군 내 일본군 출신자들의 사례
Ⅴ. 맺음말

* 학계에서 일반적으로 포로에 대한 정보 취득을 위해 질문하는 방법을 '심문'이라고 쓰고 있으나 이는 문제가 있다. 심문(審問, inquiry)은 대상자에게 하등의 통제를 가함이 없는 임의적인 질문을 의미한다. 반면에 신문(訊問, interrogation)은 신문자에 대하여 통제되는 조건하에서 직접 질문의 방법에 의하여 대상자로부터 첩보를 획득하기 위한 체계적인 노력을 뜻한다. 따라서 기존의 학계에서 통용되고 있는 포로심문은 포로신문으로 기술하는 것이 적절하다고 판단된다. 참고로 심문(尋問)은 주로 일본학계에서 사용하는 용어로 본래의 뜻은 '찾아가서 물어봄'이지만, 일본에서는 포로심문(捕虜尋問)이라는 용어로 사용하고 있다. 합동참모본부, 『합동·연합작전 군사용어사전』, 합동참모본부, 2003, 262쪽.

** 국방부 군사편찬연구소 선임연구원

韓国戦争捕虜に対する尋問の報告書を通じて見た日本軍出身の北朝鮮軍内の活動と北朝鮮の親日派粛清

李相昊

この論文は、北朝鮮軍創設時内部の親日派問題をどのように清算したのか、そしてその過程はどのように行われたかどうかをATISの捕虜に対する尋問の報告書を通じて分析した。学界では、北朝鮮の親日派の清算について、個人の生活習慣に残っている遺物までも徹底的に行われたものと評価している。

しかし、北朝鮮政権樹立以降、実際に親日派の清算に対する具体的な法令が制定されていないことから、北朝鮮の親日派の清算さらに、北朝鮮軍内部の親日派の清算は宣伝に過ぎないことを知ることができる。さらに、既存の研究は、北朝鮮内部の文書をそのまま引用することで、北朝鮮の宣伝論理に従っている危険性もある。

北朝鮮軍内部にも日本軍出身者が多く、特に日本の各種の士官学校出身者たちだけでなく、特殊部隊出身者たちまで存在していることが確認されて、北朝鮮の親日派の清算が、伝えられているように、徹底的に行われたという認識は向上しなければならないだろう。

本論文では連合国翻訳通訳局(ATIS)が行った捕虜尋問報告書を通じて、当時、北朝鮮軍内部に日本軍出身者がどのように存在していたのかを究明しよ

うとした。

極東軍司令部が編纂した「北朝鮮軍捕虜尋問報告書」によると、一部日本軍出身の北朝鮮軍将校と兵士の存在が確認されている。北朝鮮空軍保安隊暗号局に勤めた捕虜の供述によると、北朝鮮空軍の人的構成は大半が日本軍出身であることが明らかになっている。また、北朝鮮軍医務将校のほとんどは、日本の医科大学を卒業して日本軍に服務した後、北朝鮮軍に徴集されて将校として勤務する場合が一般的だった。

また、北朝鮮軍歩兵将校の中でも日本軍将校出身だったにもかかわらず、作戦将校や戦線司令部の作戦参謀として活躍した者も確認できる。結局、北朝鮮軍内部の徹底した親日派粛清という宣伝は、北朝鮮軍捕虜に対する尋問の報告書を通じても事実と違うことを確認することができる。

Many Koreans in Japan who suddenly lost their jobs also had to fight with it.

Koreans who sought daily food and income had gathered here and shown overwhelming presence. Due to convenient transportation, the market had expanded and developed further.

After the war, many Korean communities all over Japan were dismantled and reorganized, however the former Ikaino and Tsuruhashi remained in the process of transformation. Since these two areas contain important 'market' which means center point for Koreans in Japan.

Commercial districts of Miyuki-dori and Tsuruhashi are different in size. In the present day, Tsuruhashi is a lot bigger than Miyuki-dori and The Japanese as general public have less information about Miyuki-dori. The two areas are located within 20 minutes of walking distance, the back alleys of the two areas along the boulevard are also filled with Korean color, so they seem to be connected by lines.

The drastic change is taking place in conventional commercial districts and these places are no exception. Once reached a recession, soon they became unique shopping attractions after the Korean Wave boom. However, it is still difficult to predict future prospects of these areas. The historical reality between Korea and Japan still exists and behind the spotlight is the instability of a double-sided blade that could be a subject of conflict at any time.

解放後の在日朝鮮人の生活空間の変容

－大阪鶴橋一帯の「市場化」を中心に－

朴美娥

大阪は戦前と戦後、そして今日に至るまで在日コリアンの人口が最も多い所だ。その中でも現在の生野区に属する旧猪飼野には初めて朝鮮村が形成され、「日本の中の朝鮮」と呼ばれるほど多くの朝鮮人が集まり、故国での生活風習が延長された。在日朝鮮人を相手に旧猪飼野に存在した「朝鮮市場」は戦後、幸通り商店街に再編され、100年余りの連続性を保っている。

一方、鶴橋駅には大規模な闇市ができるようになり、戦後大阪の主要商圏として成長することになる。日本の敗戦と同時に大挙失業状態に陥った在日朝鮮人は鶴橋の闇市でも日常の食糧を求めて仕事を探した。闇市は日本人や在日朝鮮人、そして台湾・中国系など国籍を持つ人々が戦後の実存的競争を見せる場所だった。

1940年代後半から幸通りと鶴橋は商圏の規模は異なるが、在日コリアンが圧倒的な存在感を示し並行発展していく。そして在日コリアンの戦後史で重要な位置を占めるようになる。この地域での活動は経済活動を通じて在日コリアンの生活圏がより拡大したことを意味する。

解放以前の在日朝鮮人の住居地域は主に鉱山、工場、工事現場の周辺であったり、都市のスラム街など劣悪な環境に集中していた。しかし、植民地支配からの解放後、大規模な失業と大挙帰国によってコミュニティの分離と解体が

Central Asia, combined with traditions of native country and resident country, the re-territorialization of Diaspora is shown. Moreover, it also shows the possibility of transnational solidarity by presenting the roles of Sakhalin as a buffer zone utilizing its historical/geographical characteristics.

Through the crossing of Korean residents in Japan and Korean residents in Russia and Central Asia, this study verified the solidarity transcending nation and territory, the possibility of Korean Diaspora expanding to the whole world regardless of nation, and also the multi-centric glocalism.

在日朝鮮人と高麗人の超国家的連帯とコリアン·ディアスポラの可能性

－在日朝鮮人雑誌『民涛』と文化活動を中心に－

李榮鎬

本稿では1980~90年代の在日朝鮮人社会における高麗人に対する関心と具体的活動を確認し、在日朝鮮人と高麗人を通してコリアン・ディアスポラの可能性を研究する。

1980年代後半、米ソ冷戦構造の終息という世界史的流れに、在日朝鮮人社会では高麗人と関連したさまざまな活動を展開した。1987年に創刊された在日朝鮮人の雑誌『民涛』は、ロシアと中央アジアの高麗人をはじめとし、第三世界に関する談論を提示し、文学をはじめとするさまざまな活動を通じてディアスポラ的連帯を試みた。

文化的には本国と居住国の伝統が結びついた高麗人の文学をあらわすことで、ディアスポラの再領土化が浮彫りになる。さらに、サハリンの歴史的・地理的特性を活用した緩衝地帯としての役割を提示し、超国家的連帯の可能性を示している。

在日朝鮮人と高麗人の交差を通して、国家と領土を越えた連帯を確認することができ、国家をまたぎながら全世界に広がるコリアン・ディアスポラの可能性と多中心的なグローカリズムを確認することができる。